

1. はじめに

仏教で用いられる「衆生」(sattva)に対応する概念を、バラモン教思想、とくに発表者の専門とするニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の語彙に探すならば、bhūta や prāṇin などが思い浮かぶ。しかしこれらは、かれらの学術の根幹にある認識論・存在論等においてさほど重要な役割をもたない。「生命」といういかにも重要に思われる概念がなぜ大した関心を集めないのか。それを考えるために、本発表では「衆生」を「われわれ」と読み替えてみたい。

「衆生」は、つねに、衆生について考える主体個人を含む一人称複数の拡がりを示すといえるだろう。仏教の救済論では、それは全生命に拡がる。それでは、バラモン教の思想圏では、一人称複数はどこまで拡がるのか。本発表では、ニヤーヤ学派と叙事詩とを検討の対象とする。このふたつの領域はあまり比較対象とされないが、前者では動物がまったく発言を認められず、一方後者では動物が自由に会話を楽しんでいるという、対照的な点がある。

2. 認識論的世界における「われわれ」

言葉は意味を伝え、話し手はその意味に影響をもつ。たとえば多義語を含む文を理解しようとするとき、聞き手は、この語はどちらの意味を表しているのか、話し手は何を伝えようとしているのかと考えながら文意理解を行う。それゆえ、新ニヤーヤ学派の学者たちは、話し手の意志の理解を文意理解の成立要件と考えた。しかし、私たちはオウムの発言の意味を理解することができるが、そのとき、オウムが何を言おうとしているか推測するだろうか。現代では人間以外の動物にも言語能力が見られるとするのが一般的だが、中世の新ニヤーヤ学派の学者たちは、一様に、発話に対するオウムの意志を認めなかった。認識論的世界の「われわれ」から、オウムは締め出されてしまう。

3. 倫理的世界における「われわれ」

叙事詩や寓話では、動物たちがさまざまに会話をする。Arindam Chakrabarti は Hannah Arendt に依拠しつつ、これらの物語では、動物たちは会話に参加することで倫理的行為者性 (moral agency) を得ていると分析する。喋る動物たちは、業の主体となり、その果報を受ける。インドの古代叙事詩の大きなテーマは業と倫理である。その物語に登場する饒舌な動物たちは、業と運命に悩まされる人間たちと共に「われわれ」の世界をつくる。

バラモン教の認識論的世界と倫理的世界は実は業の思想でつながっており、言葉というひとつの鍵で往来することができる。この世界観において、言葉をもたない生物たちはどのように位置づけられるのか。より広い「われわれ」世界の可能性を検討してみたい。

キーワード：言葉、動物、倫理